

---

**踏切り妄想族 シーズン2 午後は 思いっきり田吾作**

葵さくらこ！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

踏み切り妄想族 シーズン2 午後は 思いっきり田吾作

### 【Nコード】

N4473K

### 【作者名】

葵さくらこ！

### 【あらすじ】

踏み切りと恋（ライ！）の第二弾ですw  
だまされたと思ってだまされてくださいw

(前書き)

このシリーズの第一弾 こちらです！

踏み切り妄想族 恋はドキドキ スウィートスパイラルハニー

<http://ncode.syosetu.com/n4170>

k /

良かったら先に こちらをどうぞ！

「実行部隊の久米川です。」

ヤツの話はこんな感じだったんだ。

話を少し戻そう。俺は今回もバーでヤツの話につきあってやってる。男が二人。そしてここはバーだ。常識的に考えれば、洒落たジョークでも交わしつつ、罪の無い世間話や仕事の日頃のうさなどを、ゆっくり語り合うにふさわしい場所だと思うのだが、（少なくとも自分のバーの認識はそういった感じだ）ヤツは違う。まるで違う。

3

毎回妄想だ。それも自分に常に都合の良いよう、相当に屈折された妄想だったりするのだ。

人が消費するエネルギーの大半は脳内消化なのだ。人はそのエネルギーの大半を、実は”思考”に費やす。体を動かす、臓物を常に正常に動作させるなどと言う活動は、実は全エネルギーの中ではごくごく一部に過ぎない。ほとんどが脳だ。

その大切な脳エネルギーをほぼ全て『妄想』で消費する彼は、切なさというか潔さすら感じる。

人生のどれだけを無駄にしてるかは想像に容易い。

まあいい。

とにかく話を元に戻すと、彼はまあ　こんな事を言うのだ。

「その後大久保コンツェルン、やっぱりなかなか諦めてくれないんだよね…」

妄想を現実と同じテンションで語るのも、ヤツの特徴だ。そこに照れが無い。強い酒を飲みたいと言っていた彼は、アーシャンボー・クレオール（ラム）を今日は口にしていた。そして遠くを見つめながら語る。思い出の旋律をひとつひとつ指で手繰り寄せるように。

が、繰り返すが、これはすべて妄想だ。空想だ。虚無の世界だ。

で、彼は言うんだ。

「大久保コンツェルンの実行部隊の久米川が、僕にしつこくアプローチしてきた…」

前回彼から聞いた話（妄想）では、踏切りで娘を助けた縁で、大久保コンツェルン総裁、大久保爾大朗に合う　酷く気に入られてしまつて、大久保コンツェルンの総裁に僕を誘う　断る  
「ワシは諦めないよ」と大久保爾大朗に言われ、壮絶な大久保コンツェルン引き入れ工作が始まる！

…というのが、今回の彼の妄想のスタート地点なのだが、とりあえずここで、大久保コンツェルン実行部隊「久米川」が、登場したというのが、今回の話の中核のようだ。

彼の語りに戻る。

「ある日、おれふつうに部屋で寝てたんよ。したら、宅配便の人が突然やってきて、『え！俺何も頼んでませんよ！』と言ったら、釣り竿が届いてるって言うんよ！贈り物だつて言うから、とりあえず中開けてみたら、超高級和竿、田吾作！それが突然、誰だかワラン人から届いてるんよ！」

彼は語る。テンションが高い。彼は続ける。

したらドアが開いて、黒ずくめの男がいるんだ。そして言うんだ。

「気に入つて…、ただけましたか…？（ニヤリ）「…つて。

それがどうやら今回の話の中核、「実行部隊久米川」だそうだ。痩せ形。背丈は標準だが、眼鏡の奥で時として光る眼光は、冷淡、そして冷酷。薄い唇から時折見せる口元だけの笑いは、ある種背筋が凍り付く殺気すら感じるそうだ。

ただ、その喋り方は、どこことなく人を食ったようなというか、小バカにしたような感じというか。決してはっきりと喋らない。もったり喋るが、時として突き刺すような重厚さもある。

闇社会の真の住人はこういうタイプだろうか？

表と裏。光と闇。それが巨大コンツェルンの真の姿なのかもしれない。そしてその闇社会、真の刺客、実行者、それが久米川と言う。

それが、今日釣り竿を持ってきた。どういう事だ？

彼は言う。

「小村さん…、釣りが好きだって…、聞いたものでして…、」  
(久米川)

久米川の鈍い眼光が鋭く眼鏡の奥で光り、心臓を捕らえる。ニヤリと笑う唇は、決して友愛ではない。ある種強制だ。

それが僕の気を引く為の『特務工作』である事は確かだった。寧ろ脅迫に近い。全ては僕を大久保コンツェルンに引き入れる為。

彼らは僕の発言、行動を徹底的に調べ、僕の欲しがるものを全て与える事によつて、グループ内に引き込もうとしているのだ！僕は背筋が凍りついた！

そこで僕は言つたんだ。

「待つてください！釣りが好きだつて言つたのは、なんとなく”釣り堀つていいヨネ！”つて言つた程度で、それでもさすがに毎週行く気にはなれないよね！つて思いつつも、そもそも実際釣れてしまつと、コイとかフナとかの強烈な生臭さに、かなりドン引くよね！つて言つただけで、別に強烈な釣りのマニアだなんて言つた記憶ありませんよ！」

「お嫌いですか、お釣りは？」（ニヤリ）

「そういう問題じゃありません！そもそもこんな高級釣り竿いただけませんよ！」

「高級ヘラ釣り用和竿 田吾作、最高級品です。360万です。お気に召しませんでしたか……？」

「そういう問題じゃないッス！そもそもたかが釣り竿に360万つ

「意味わかんないですよ！」

「お気に召しませんでしたか…それは残念だあ…」と、久米川、多少残念そうな表情を見せるが、口元には薄く笑いを浮かべる。

「鮫山！鮫山！」

久米川がもう一人の刺客を呼んだ。それが鮫山。彼は久米川の忠実な部下で、命令とあれば、チャリパクぐらいは平気であるような男だ。

鮫山は久米川と違い、サングラスをしている為、顔はよく分からない。

鮫山は久米川の指示を聞き小さく頷いたかと思うと、そのまま竿を真っ二つに折ってしまったんだ！360万を何も躊躇せずになだ！

「何やってんスカ！もったいないじゃないっすか！」

思わず僕は言ってしまったが、その声はもう届かない。360万の高級ハンドメイド和竿田吾作360万は一瞬にして物干しにすらならない『単なる竹だった物体』に成り下がってしまった！

これが闇社会なんだ…。

僕はその時、背筋が凍るような思いをしたよ…。

彼は再び遠くを見つめる。

なんだかよく意味が分からんw

「今度は翌日なんだ。」

と、彼は続けた。まだ話あるんか！

「朝起きたら家の前にフェラーリが横付けされてたんよ！」と彼。

そこで久米川が登場！前回同様、「気に入って…、いただけましたか…??」と発言。久米川、更に続ける！

「フェラーリ 550…。価格はまあ…、19万ユーロ…、日本円で行くと2390万円といった感じでしょうか…」

久米川再び怪しげな眼光を光らす！ヤツはカマボコの試供品でも手渡すが如く、軽々とフェラーリを手配するんだ！コレが闇社会だ！

僕は思わず言っちゃったんだ！

「フェラーリ 550と言えば、空吹かしだけでも甘美なエンジン音とレスポンスを示すV12エンジン搭載の、まさにキング・オブ・フェラーリの名にふさわしい、引き締まった乗り心地と重厚さすら併せ持つ、超高級車じゃないっすか！ただだけませんよ！絶対にただだけませんよ！！！！！」

「小村さん……。赤いお車がお好きだつて……。言っちゃったから……。」  
(久米川)

「それはミニ四駆の話です！たまたま自分が改造しまくったミニ四駆が、たまたま赤だっただけで、それも最終的に『軽量化！』とか言っちゃってヤスリで削り過ぎたら、机から転落の衝撃でボディがベッコリ行っちゃったっていう過去があるだけの話なんです！！！そもそも赤ってだけでナンでフェラーリなんスか！」

「そうですか……。お気に召しませんでしたか……。」と久米川。

「そっという話じゃなくて！」

「鮫山！鮫山！」

鮫山登場。久米川、鮫山に目配せする。鮫山、静かに頷く。

ボンッ！

一瞬でフェラーリが炎上。僕が受け取らないと分かった瞬間、不要だと判断でもしたのだろうか？最上級フェラーリ 550 2390万円（19万ユーロ）は、一瞬にして『単なる鉄だった物体』へ変貌。強烈な追い込み。

「僕はこの時も闇社会の恐ろしさを強く感じたよ……」

…と彼。

「僕はこの時、この鉄屑、誰が始末するんだろう？と一瞬思ってしまったよ……」と、更に彼。彼はグラスのラムを少しだけ口に運ぶ。

「今度は東急ハンスなんだ。」と彼。

まだ続くんか！

自分が東急ハンズに行った時、突然店員が皆、オレに『土下座』するんだ！

どうしたんだろう？って思ったら、そこで久米川再登場だよ！

そしていつもの通り、こう言うんだ！

「気に入って…、いただけましたか…、…って。」

状況を聞いて初めて理解！ヤツは東急ハンズを企業毎買い上げてしまったんだ！さすがにそれはビビった！僕は言っちゃったんだ！

「待つてください！久米川さん！僕は今日、ハンズにボールペンの換え芯を買いに来ただけですよ！あとそれと台所の三角コーナーがカビまみれで再起不能になったから、安けりゃ買い換えようって思っただけですよ！」

「…気に入って…、いただけませんでしたか…??」と久米川。

そりゃそうだ！ハンズ買収なんて、あまりにあんまりだ！

しかも驚いたことに、店内のロゴやビニールも全て「KOMURA HANDS（小村ハンス）」に書き変わっていた！1976年（昭和51年）、遊休地利用を図るため、新規事業としてホームセンター事業に参入し、同年11月に第1号店となる藤沢店が開店した東急ハンス 『34年の歴史』 に僕が幕を閉じるなんて、あんまりじゃないか！！！！

「…そうですか…、お気に召しませんでしたか…。鮫山！鮫山！」  
待ってくれ！また爆破か！

「やめてください！爆破だけはやめてください！」

何故？という表情の鮫山。手元にはスイッチが握られ、まさに押される直前の状態だった。

よかった！あぶなかった！

「じゃ、あの大学生にあげちゃいますか。君、君、名前何？ああ、遠藤くん、じゃ今日から君に、このハンスあげちゃうから。今日か

「ここは遠藤ハンスだから。」とめんどくさそうに言って彼らはその場を立ち去った。

大学生は無邪気に、「マジスカ！まじでもらっちゃっていいンスカ！もう学校とかもやめちゃっていいンスカ！」と無邪気にウカれていた。

「僕はこの時も闇社会の恐ろしさを強く感じたよ…」

…と彼。

僕的に素朴な疑問なのだが、別に東急ハンス買収しなくても、「ボールペンと三角コーナーの買い占め」の方が、ハートをガツチリつかめるよーな気がするのだが、どうだろう。

どうでもいい。そもそもこれ、妄想だし。どーでもいいし。

「そして今度は電車に乗る時にね」…と彼は続けようとした！

もじいいw もじいいw

<他にもたくさん作品があります!>

お気軽にお越しください! (^ ^) (^ ^) /

<http://nitiijyo.sakura.ne.jp/>

トップページ

<http://nitiijyo.sakura.ne.jp/diary/>

<http://nitiijyo.sakura.ne.jp/diary/oowaku.html> ログページ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4473k/>

---

踏切り妄想族 シーズン2 午後は 思いっきり田吾作

2010年10月11日17時01分発行